

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第139号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成17年3月21日

キジ(亜種コウライキジ)



2005. 1. 14 札幌市手稲区星置 撮影者 志田博明

〒006-0853 札幌市手稲区星置3条7丁目

6-5



も く じ

探鳥地紹介 宮城の沢 (札幌市西区)	氏家 正毅	2
北海道におけるウズラの現状を探る	奥山 正樹	4
マリーナ・オーサカ号事故による野鳥被害		
北海道環境生活部自然環境課	武田 忠義	8
身近な鳥の調査	藤巻 裕蔵	10
シラガホオジロ群れでの飛来報告	篠原 盛雄	11
鳥好きの文学散歩 5 吉村 昭「漂流」	高橋 良直	11
探鳥会ほうこく		12
鳥民だより		13
探鳥会あんない		14

探鳥地紹介

宮 城 の 沢 (札幌市西区)

氏 家 正 毅

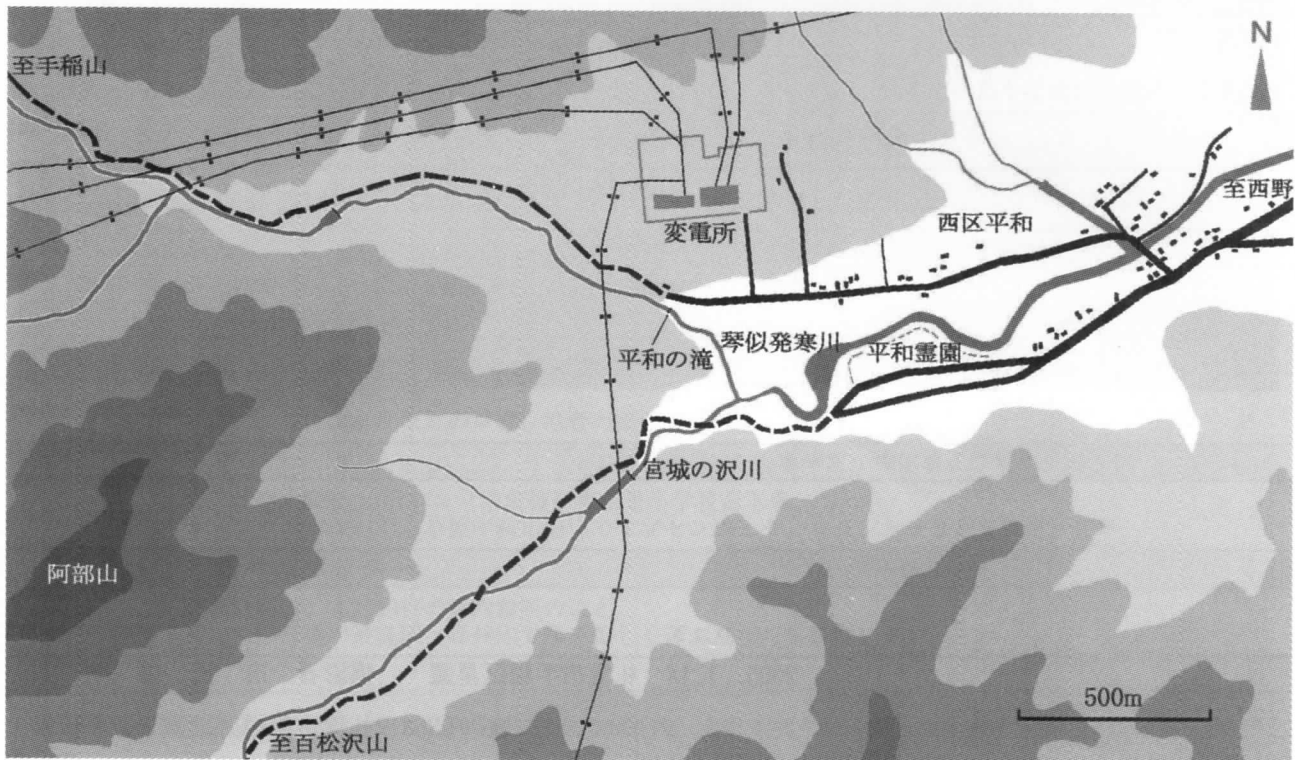
「宮城の沢」は、琴似発寒川の支流、宮城の沢川をその脇の林道沿いに巡る探鳥ルートです。平和の滝の東隣といえばおおよその見当がつくでしょうか。そこが近年私の通い始めたホームグラウンドです。

ホームグラウンドと偉そうに言ってしまいましたが、通い始めてまだわずか1年目。実は先輩方から、自分のホームグラウンドを持つと色々勉強になると教えられ、「西野に住んでいるのなら、宮城の沢はぜひ言った方がいい。」と勧

めて頂いたのがきっかけでした。以前からここは、ベテランバードウォッチャーの間ではよく知られた穴場の存在だったようです。

ではその宮城の沢について、まだ少ない知識ではありますが紹介したいと思います。

場所は、JRバス西野平和線の終点からさらに先、平和の滝への右折路をそのまま直進し平和霊園を通り抜けると、奥に林道入り口のゲートがあります。そこからがこのルー



宮 城 の 沢 案 内 図

トの出発点です。ベストシーズンは4月下旬からゴールデンウィーク頃でしょうか。

この時期まだ残雪のある林道に足を踏み入れると、すぐに鳥たちが出迎えてくれます。この辺りはアオジ、クロジ、ルリビタキ、カラ類をよくみかけます。100mほど進むと壊れた鉄橋があり、そこを渡ると進むたびに次々と地面から鳥が飛び立ちます。このルートは主に地面を注意しながら鳥を探すのがポイントだと思います。鉄橋を過ぎた辺りからは、先に挙げた鳥たちの他ヤブサメ、クロツグミ、ミソサザイ、等も見られます。道路脇の笹の中を注意しながら歩くとベニマシコがいたこともありますし、私は運良くコマドリにも出逢えました。

左手に宮城の沢川の流れを聞きながら林道をさらに登っていくと左手に砂防ダムが現われます。ダムの上ではキセキレイをよくみかけました。



コマドリ 2004年5月1日 宮城の沢 撮影筆者

砂防ダムを過ぎるとトドマツの林に入ります。所々のトドマツ、カラマツの幹にクマガラの採餌痕を見かけます。トラツグミもこの辺りでよく見ました。ここでもルリビタキは、道案内をするように先へ先へと飛んでいますし、アオジがすぐ近くの枝で美しい声を聞かせてくれます。その声が、沢の流れる音と相まって心地よく、歩いていてとても幸せな気持ちになります。

さらに進むと、木を渡しただけの朽ちかけた橋がでてきますが、春はまだ残雪が高く乗っていて渡りづらく、注意が必要です。

橋を渡ると今度は宮城の沢川を右手に登っていきます。この辺りでも沢の方からよくコマドリの声を聞きました。ここから先は道の両脇にトドマツの低木を見ながら進みます。トドマツの葉の中を、耳を澄ませ目を凝らすと「チッ、チッ」とキクイタダキが飛び交っています。さらに進むと両脇がカラマツ林に変わり、ここでもクマガラの採餌痕が

所々にみられます。アカゲラ、コゲラ、そしてエナガをこの辺りでよく見かけます。私はここでウソに出会いました。

トドマツ、カラマツの林を抜けるとその先は明るく開けた落葉広葉樹の山林がつづきます。

ここからは、おなじみのカラ類、キツツキ類、キバシリ等が時折見られる程度で変化のない山道を進みます。再び宮城の沢川を右に渡る所までくれば、ここが一応の折り返し地点で、再び来た道に戻ります。さらに進めば林道はぐるりと近辺をめぐってこの地点に戻って来るようですが、その先は行ったことがありません。さらに進まれる方は地形図等で確認してください。

下りの道々でもまた、地面に木の枝に多くの鳥たちをみることができると思います。

4月下旬から5月上旬、このルートは短い距離の間にたくさんの鳥たちに出逢える確率が高く、その鳥の多くが先にも述べたように、雪解け後現われた地表で餌をとっています。チャンスに恵まればまさに道を曲がるたびに鳥がいるといった感じですので、静かにゆっくり地面に注意しながら歩くことをお勧めします。

それ以外の時期にも何度か通いましたが、その時はあまり鳥に恵まれませんでした。

さらに昨年の11月中旬に訪れた時、少し気になる事がありました。普段はあまり車の気配がなかった林道に、踏み散らしたように車のわだちが残っていたのです。そのわだちが、あるところでは林道からはずれていたり、道を横切る小さな沢の中を歩いていたりして地表がだいぶ痛んでいました。私は最初、台風によって道を塞いでいた倒木の処理のために、作業車がいったのか

とっていました。しかし途中で出会った、よくここを散歩しているという方に聞いたところ、4輪駆動の車が遊びで入って来ているのだと言う事でした。自分の目で確認していないので断定はできませんが、もし事実であればたいへん憂慮すべき事です。静かな鳥たちの生息場所が心無い人達のために脅かされるのは非常に残念です。普段は林道のゲートは閉められていて、一般車両は進入が禁止されているはずなのですが、今後、少し注意して見て行きたいと思います。

ここは、普段人の訪れることが少ない場所だけに、鳥たちも多く姿をみせるのでしょう。鳥を見に入る自分も含めて、できる限り鳥たちの生活を脅かさないように、この場所を長く楽しんでいければと思います。

〒063-0038 札幌市西区西野8条2丁目12-20・106号

## 北海道におけるウズラの現状を探る

奥山正樹

### はじめに

ウズラは、鳥自身よりも卵の方がはるかに多くの人々に親しまれている。しかも、一般の人のほとんどは、ウズラをニワトリのように人間が作り出した品種だと誤解しており、ましてや日本在来の野鳥だとは思ってもいない。バードウォッチャーの間でも、野生のウズラはまず見ることのできない「幻の鳥」となって久しいのが現状である。

1998年に見直された全国版のレッドリストでは、ウズラは情報不足（DD）として初めてリストアップされ、北海道レッドデータブック（2001）でも、希少種（R）に位置づけられた。しかしその一方で、ウズラは、現在でも狩猟鳥に指定されたままで、全国的な狩猟規制では1人1日5羽まで捕獲してもよいことになっている。ごく一部の府県が知事の権限でウズラを禁猟としているが、北海道では今のところ特に独自の規制はされていない。

筆者は、このようなウズラがおかれている現状や辿ってきた歴史に関心を持ち、個人的に文献や生息情報を収集してきたが、2004年4月、所属先の人事異動により北海道に転勤する幸運に恵まれた。それ以来、北海道野鳥愛護会をはじめとする多くの方々から様々な情報をいただいている。ここでは、ウズラという鳥に少しでも注目してもらいたいという願いを込めて、若干の報告をさせていただきたい。

### 1 人とウズラの文化史

ウズラ類の鳥は、西洋でも古くから狩猟の対象とされており、古代ギリシャなどでは「闘鶉（とうじゅん）」も行われていた。

わが国でもウズラは古事記、万葉集、千載和歌集などから歌に詠まれ、平安時代にはすでにウズラの調理法が書かれた書物もあったという。室町時代にはすでに籠で飼われていた記録もある。

短歌や俳句の世界では、「鶉鳴く」は「古里」の枕詞、「鶉」「鶉駆ける」「鶉野」は秋の季語とされ、さらに春の季語「麦鶉」夏の季語「鶉の巢」のほか、「片鶉（かたうずら）」「諸鶉（もろうずら）」のように人の心象を映したものなど、様々な表現に多用されてきた。

絵画の世界でも、中国宋代の画家李安忠が足利家に伝えた「鶉図」（国宝）を筆頭に、江戸時代を通して、とくに土佐光起などの土佐派の画家がお家芸として好んで鶉を描いたため、日本画では「鶉図」が一つの定型として確立し、現在にも引き継がれている。また、陶磁器の世界でも、2

羽の鶉を配した「鶉文様」が伝統的な図柄となっており、特に17-18世紀の柿右衛門様式（伊万里・有田焼）に代表的に見られる。和服の柄や帯止めなどにも鶉文様は好まれてきた。

江戸時代には、武士階級の間でウズラの鳴き声を競う「鶉合わせ（うずらあわせ）」が大流行し、金銀や象牙をちりばめた豪華な鳥籠で飼われ、優秀な個体がいへん高価で取り引きされていた。特に鳴き声が「御吉兆（ごきつちょう）」と聞こえるものは武将たちが縁起を担ぎ特に珍重されたという。

また、こうした愛玩飼養の一方で、わが国でも野生ウズラは常に狩猟の対象とされてきた。古くは古事記や万葉集の時代の騎馬狩や鷹狩に始まり、明治から大正にかけては、大陸でも大規模なウズラ狩と流通が行われた。狩猟統計によると1930年代には国内で年間約60万羽が捕獲されていた。ウズラは、肉が美味なだけでなく、飛ぶ速度が比較的遅く、地面に沿って低く一直線に飛ぶために射撃しやすいこと、猟犬の技を堪能できることなどから、銃猟の対象として常に人気があった。

卵の食用を目的とした産業としての「養鶉（ようじゅん）」の歴史は意外に新しく、宮中の大膳職に納入する目的で、明治中期に東京で始められたのが最初である。戦前には全国で約200万羽が飼われるほど盛んになったものの、戦中の飼料不足のために一時はほぼ消滅してしまった。そのため、現在の産業用ウズラは、戦後愛知県で数つがいから再出発された系統だとされている。現在でも、全国約700万羽のうちの約65%が愛知県で飼育されている。ウズラは日本人が家畜（家禽）化した唯一の野生動物だとされており、その養鶉技術は世界中に広く伝わっている。

### 2 ウズラにとっての北海道

#### [従来の生息状況]

ウズラは、同種と分類されることもあるヨーロッパウズラとあわせて、キジ科の中では唯一の渡り鳥とされる。1942年に農林省の内田清之助、清棲幸保両氏が著した「鳥類標識法ニ依ルウズラノ習性ニ関スル調査成績」（鳥獣調査報告第10号）は、1925年から1933年までの間に全国で実施された標識調査（標識放鳥数9,786羽）の結果などが掲載され、現在でも唯一ともいえる野生ウズラの生態に関する包括的な文献である。その中では、ウズラの主な繁殖地は北海道と東北地方とされ、北海道で繁殖期に標識された



個体が、群馬、千葉、神奈川、静岡、愛知、山梨、岐阜の7県で回収され、移動距離は700-1000kmであると記載された。また、北海道での出現期は5-11月(ごく少数は越冬する)で、『5月初旬青森県津軽半島や下北半島より渡島半島、福山、木古内、湯ノ川村、柏野方面に渡来し、その後噴火湾沿岸を経て胆振、日高、後志、石狩方面へ渡り、さらに天塩、北見、十勝、釧路方面に移動後繁殖をする。』『夏期気温の比較的高い草生の広い原野か、積雪の少ない海岸地の平野に多く、2、3尺位の草生原野、牧場、荒畑、泥炭地に多く、5、6尺以上に草の茂った地には生息しない。』(いずれも斎藤春治氏の報告)と記述されている。放鳥地の地名としては、札幌市外月寒村、札幌郡下手稲村、豊平郡月寒村、勇払郡苫投町があげられ、札幌近郊でウズラが普通に繁殖していた状況がうかがえる。当時北海道庁に所属し農林省の委嘱を受けてこれらの標識調査を実施した斎藤春雄氏は著書「北ぐにの鳥」(1984)の中で、『苗穂刑務所付近の原野でひと夏に200羽のオスウズラを捕り、足環をつけ放鳥したものである。ここの草原では、夕方になるとオスのウズラがよく鳴いていた。』『札幌付近の原野でも、昭和20年ごろまでは、かなり繁殖していた』と記している。その後、「日本鳥類大図鑑」(清棲幸保、1965)では、これらの報告の内容に加えてさらに標識調査の結果が充実し、北海道の繁殖地(札幌付近)で放鳥したウズラは、山形県、宮城県から紀伊、四国、九州(福岡県)までにおよぶ54箇所まで回収されたことが図とともに示されている。(図1)



図1. 標識調査によるウズラの渡り：  
清棲(1965)および山階鳥類研究所  
(1998)より作成。

#### [鳥獣統計]

アイヌ関係の文献にはウズラを特定できるような記述は

見当たらないが、江戸時代の「松前志」(蝦夷国松前領の産物帳)には「鶉」が記載されており、北海道でも古くから狩猟されていたことは間違いのないと思われる。

国の発行する鳥獣関係統計(1960年度までは狩猟統計：以下「鳥獣統計」と記す)は1923年からのデータが利用可能となっているが、当時の北海道における一般鳥獣の猟期は9月15日～4月15日だった。1947年からは10月1日～1月31日に短縮され、その後も終期が何度か変更されて今日に至っている。また、1946年にはかすみ網が、翌1947年には罾による鳥類の捕獲が禁止されている。全国的に見るとウズラの捕獲数は1930年代の約60万羽をピークに急減しており、現在は年間約2千羽の捕獲に過ぎない。これは登録狩猟者1人あたり0.01-0.02羽という低いレベルである。北海道では、冬期にはほとんど渡去してしまうという事情があるが、それでも1960年代には約5千羽が捕獲されている。しかし、それをピークにやはり激減し、現在は年間約20-30羽程度(登録狩猟者1人あたり0.003-0.004羽)に過ぎない。ただし、1960年代にピークがあったのは、全国の都道府県をみても北海道のみで、他都府県ではいずれも1920-1950年代にピークがあった。

また、鳥獣統計には放鳥数についてもまとめられているが、これによると、北海道では、1996年から道猟友会支部や猟政協議会などにより、年間約2,000羽前後が放鳥されている。我が国では狩猟資源としてのウズラの放鳥が1970年代初頭から主に行政(都県)によって行われてきたが、1995年頃からは猟友会に主体が移っている。鳥獣統計上は北海道庁がウズラの放鳥を行った記録はない。

#### [近年の調査報告]

内田・清棲らの調査以降、鳥獣統計を除いては、ウズラの生息状況に関するまとまった報告はほとんどない。北海道に関しても同様の状況だったと思われる。

環境庁(当時)が第2回自然環境保全基礎調査(通称「緑の国勢調査」)の一環として実施した日本産鳥類の繁殖分布調査では、1978年に行われた現地調査の結果がまとめられている(1979)が、北海道でのウズラについて、繁殖を確認したaランクが道央から道南にかけての4メッシュ(1メッシュは約5km四方)、繁殖の可能性があるメッシュが道北、道央、道南にかけての12メッシュ、生息を確認したが繁殖についてはなんともいえないcランクが2メッシュの合計18メッシュで確認された(図2)。

北海道生活環境部自然保護課が「北海道自然保護計画」の策定資料として1981年にまとめた「北海道における鳥類の地域別生息状況」では、のべ208の既存文献から、支庁単位を基本とした17地域での分布状況が示されているが、ウズラについては、石狩、渡島、胆振、後志、日高、空知、上川、留萌、宗谷、十勝、釧路、網走、知床半島の13地域で生息情報があつた。反対に情報がなかったのは檜山、日

高山系、大雪山系、根室の4地域だった。

北海道環境科学研究センターが2002-2003年度に環境省生物多様性センターの委託で行った生物多様性調査「北海道夏鳥調査」の報告書(2004)では、1970-2002年までの確認情報が整理された。ここでウズラについては全体で53メッシュ(1メッシュは5km四方)で情報が有り、釧路支庁、根室支庁各管内では情報がなかった(図2)。情報件数は年間10件以下で少ないが、経年的に見ると概ね横ばいの傾向にあった。確認されたのは6月から7月にかけてが最も多いが、4月4日から12月4日までの長い時期で情報があつた。確認されたメッシュの87%が標高200mより低い地域で、植生としては農耕地、草原、低木林などを好む傾向が見られている。



図2. 北海道におけるウズラの分布情報:  
黒丸は環境庁(1979)、網四角は環境省自然環境局生物多様性センター(2004)。

### 3 江別市角山での調査結果

2001年に北海道野鳥愛護会がまとめた「私たちの探鳥会一探鳥会30年の記録」では1970年以来の12地域での探鳥会での記録が詳しく掲載されている。ここでウズラが記録されているのは福移(1974-1999年の記録で、1981、92、94、96、97、98年には確認なし)と東米里(1984-1999年の記録で、1992年のみ確認)の2箇所となっている。福移の探鳥会では、確認されない年が増えている傾向にあり、2004年(7月4日)にも探鳥会では確認されなかった。筆者も2004年の6月20、27日、7月3日に福移でウズラを探したが、確認できなかった。

北海道野鳥愛護会のホームページ「野鳥情報伝言板」で広川淳子氏が提供された情報では、2004年6月7日に福移の土手下の草地でウズラの声聞いたものの、1週間ほど後には草が刈られ声は聞けなかったとのことであった。また、同氏からは、2004年6月8日から17日の間に、江別市角山の石狩川左岸の堤防外側草地で、正午ごろにウズラの声を確認したという情報を提供していただいた。戸津高保

氏からは、10年ほど前に福移の対岸(石狩川右岸)でヒナ連れのウズラを確認したという情報が寄せられた。

#### [現地の環境]

広川氏の情報を基に、江別市角山の石狩川左岸を2004年7月18日に調査し、ウズラのオスの声を確認した。

現地は新石狩大橋と豊平川合流点の中間付近で、角山第一樋門のやや上流に位置する堤内(堤防の外側)で、堤防と牧草地に挟まれた幅約25m程度の草地だった。周囲には他の個体の声は確認されず、この周辺には、少なくともオスは1羽だけが生息していると考えられた。

ウズラの生息が確認された地点を植生的に見ると、しばらく手が入られず遷移が進行しつつある牧草地であり、下層にはオオアワガエリ、ナガハグサ、ホソムギが平均草高50-60cmで密生している。上層は約30%の被度で、高さ100-180cm程度のヨシ、エゾノギシギシ、アメリカオニアザミ、アワダチソウ類などがパッチ状に点在している。またこの周辺は、堤防の維持管理工事や牧草地の刈り取りなどで周辺に人や車両が入り込んでいるものの、橋や合流点から遠く、公園緑地的な整備もされていないためか、一般の利用者は河川敷にもほとんど見られない。とくにウズラが生息している草地には、まず通常は人が立ち入ることがないように思われた。

※植物種の同定等に関しては、北海道大学大学院農学研究科園芸緑地学講座の近藤哲也助教授にご指導をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

#### [行動圏等]

7月18日から9月4日まで、9日間(うち4日は2日ずつの連続)で延べ56.8時間、ウズラの声を確認した。この調査地は、堤防上から調査すると、ウズラが鳴いているおおよその位置を確認できる理想的な条件にあるが、調査期間中一度も姿を観察することはできなかった。よってこのオス個体が繁殖しているのか、ペアリングに成功しているのかなどは不明であった。記録した声はオスのいわゆる「雄叫び(crow)」であり、「ジュジュビー」「グワッグルー」と聞こえる節を1回としてカウントした。

調査期間中、このオスウズラは約1haの狭い行動圏から出ることなく定着していた。また飛翔しての移動は一切観察されず、歩く移動しか行わなかった。歩き回る行動は、日中の短時間に見られたが、それ以外は多くの時間をごく狭い範囲で過ごしていた(図3)。

なお、この個体のこの場所における2004年の終認は9月4日だった。

#### [発声のパターン等]

家禽ウズラの発声については遺伝学的、生理学的観点から比較的よく研究されているものの、野生ウズラの発声行動を記録した文献はほとんど見られない。今回は、野生ウズラの効果的な調査時間を明らかにすることなどを主な目

的として、5分毎の発声回数を記録することにより、日周的な発声パターンなどを調べた。

その結果得られた主な傾向は以下のとおりだった(図4)。

- ① 日出前と日没前後には、連続して鳴くことが多かった。
- ② 日中には、日による鳴き方の差が大きく、2時間くらい間隔が開く場合も多かった。
- ③ 長い時には30分くらい断続的に鳴き続け、ピーク時には約7秒間に1回の間隔だった。

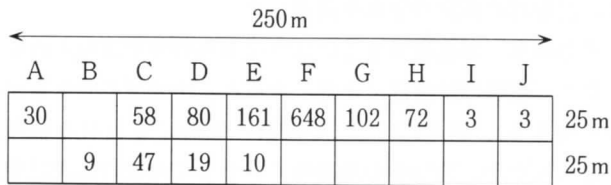


図3. 角山におけるオスウズラの行動範囲：数字は総調査時間56.8時間における25m区画ごとの発声回数を示す。

この結果から、繁殖期にウズラの生息の有無を確認するためには、探鳥会のような日中の観察だけでは確実とはいえず、日没前後に調査を行うのが効果的であると考えられた。

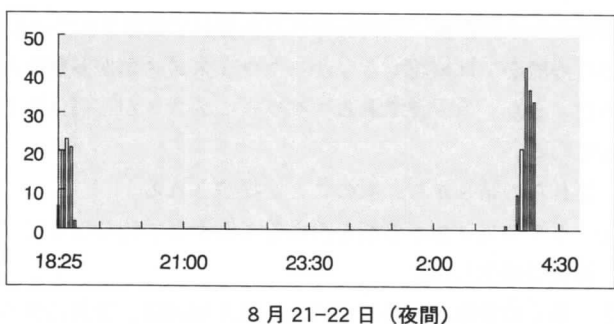
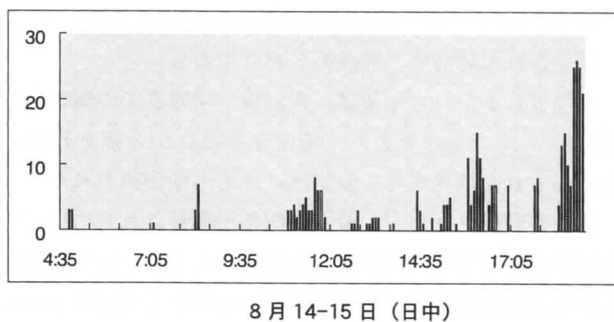
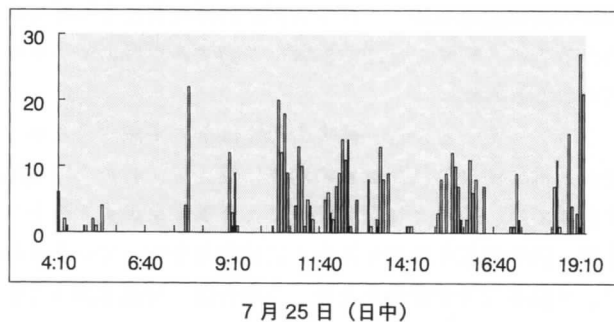


図4. 角山のウズラの発声パターン：5分ごとの発声回数を示す。

### おわりに

今回報告した角山での事例は、あくまで1個体の記録に過ぎず、繁殖しているかどうか不明なため、北海道のウズラを代表させて述べることはできない。ウズラの繁殖地として成立するための条件は何なのか、その条件を満たす環境がどのように減少し、どの程度残されているのか、そして、北海道にウズラはまだどのくらい生息しているのか、今後も引き続き角山のウズラを通して考えていきたい。

角山という地域は、戦後すぐに現在の東京都世田谷区の方々が入植し苦勞して開拓した酪農地帯である。私事になるが、世田谷区の隣の杉並区出身で、世田谷区にも親戚があることから、少なからず縁と愛着を感じている。

札幌近郊にもウズラが普通に見られた時代から四分の三世紀。福移や角山が「最後までウズラがいたところ。」と記録されるようなことがないことを祈りたい。

最後に、本稿が、北海道の愛鳥家の方々に、少しでもウズラに関心をもっていただき、貴重な観察記録が蓄積されていくきっかけになれば有り難い限りである。

### 文 献

内田清之助・清棲幸保(1942)鳥類標識法ニ依ルウズラノ習性ニ関スル調査成績. 鳥獣調査報告10:71-127.  
 奥山正樹(2004)狩猟鳥ウズラの現状. 山階鳥類学雑誌35:189-202.  
 奥山正樹(2004)栃木県におけるウズラの放鳥. Accipiter10:1-14  
 環境省編(2002)日本の絶滅のおそれのある野生生物2 鳥類. (財)自然環境研究センター.  
 環境省自然環境局生物多様性センター(2004)生態系多様性地域調査(湿原生態系調査)報告書-北海道夏鳥調査-.  
 環境庁(1979)第2回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書(鳥類)  
 清棲幸保(1965)日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社.  
 齊藤春雄(1984)北ぐにの鳥. 北海道新聞社.  
 北海道(2001)北海道の希少野生生物-北海道レッドデータブック2001-.  
 北海道生活環境部自然保護課(1981)北海道における鳥類の地域別生息状況.  
 北海道野鳥愛護会(2001)私たちの探鳥会-探鳥会30年の記録-.  
 山階鳥類研究所(1998)渡り鳥アトラス鳥類回収記録解析報告書(非スズメ目編1961-1995年).

〒060-0006 札幌市中央区北4条西18丁目

桑園住宅401-14

# マリン・オーサカ号事故による野鳥被害

北海道環境生活部自然環境課 武田 忠 義

2004年11月13日(土)午前1時49分頃、韓国籍の貨物船マリン・オーサカ号5,500トンが、折からの暴風に流されて石狩湾新港北防波堤に衝突し、船体が3つに分断、沈没した。これにより7名の方が死亡し、燃料の重油(C重油)約200トンが流出した。

この事故により海鳥類に対する油汚染被害が発生したので、その概要を報告するとともに、反省と今後の課題について、若干の感想を述べたい。

## 1 重油の流出と回収

事故発生直後、海上保安庁はじめ関係行政機関からなる対策本部が事故現場近くに設置された。ナホトカ号事件(97年1月)に比べ、幸いにして流出規模も小さく、現場へのアクセスも容易であり、また関係者の経験の蓄積も進んできたため、対応はスムーズに進んだ。

事故翌日から航空機、船舶による油の拡散状況の調査及び各市町村・消防等による海岸への漂着状況の確認が行われた。

当初、北防波堤周辺を中心に港内及び港外へ帯状に重油の流出が認められた。港内の油は事故直後から回収が進められたが、流出油の拡散を防ぐオイルフェンスの設置は、荒天のため15日まで待たねばならなかった。

航空機による調査では、14日午前には、浜益村南部の愛冠岬付近沖まで流出油の帯が達したが、回収を要するような濃い油は認められず、15日の確認を最後に消失し、心配された広範囲にわたる海岸への漂着は無かった。

一方、16日になって事故現場から直ぐ東側の浜に油の漂着が確認され、石狩市や漁協により、手作業で回収された。港内やオイルフェンス内の油は、ポンプ等により回収された。

その後も市町村・消防・漁協等により海岸の監視が続けられたが、潜水調査等から油の流失は終わったと判断されたことから、監視体制は徐々に縮小され、漂着油の回収も11月末までにはほぼ終了した。

また、当初からボランティアの申し入れも多数あり、対応窓口も設けられたが、結局その必要はないと判断された。

## 2 野鳥への影響と救護活動

油の流出により、海鳥への影響が懸念された。考えられる影響は大きく分けて三つ。事故現場での影響、海岸に漂着した場合の沿岸性の種への影響。そして、沖合での外洋性の種への影響である。

いずれにせよ、この時期に生息していそうな種類はリストアップできるが、どのような種類がどこにどういった密度で分布しているか把握できるようなデータが無く、影響

の程度も予測できなかった。したがって、取り急ぎ、15日、道庁自然環境課と北海道環境科学研究センターで、事故現場から、当初流出油の漂着が予想された浜益村までの範囲で、沿岸部の鳥類の分布を調査した。

その結果、事故現場近くには特に海鳥の集中は見られないこと(現場埠頭付近は1月になると、ホオジロガモ等が多く集まる)、沿岸には、この時期一般的に見られる種類が見られたが、特に集中域は無く、そして沖合の状況は全くわからない事が、改めて確認された。

また、対策本部では今回、海岸脆弱性指標地図(ESIマップ。重要な自然環境、漁業、観光施設などを地図上に整理し、油が漂着した場合の影響予測を行う)を活用しての対策立案を試みたが、野鳥を初めとした自然環境の情報は不十分であったため、我々の確認結果や北海道医療大学樋口教授の観察記録も加え、日本海沿岸の研究者にも情報を求めたものの、野鳥に及ぼす影響を予測するだけのデータは得られなかった。

こういったことから、被害の程度は全く予測できなかったが、油に汚染された野鳥の回収に備えて、石狩支庁環境生活課では、職員と鳥獣保護員により海岸を調査するとともに、油の漂着を確認するために見回りを行っている市町村、漁協職員等が野鳥を発見した場合は、対策本部まで搬入してもらうこととした。また、保護収容された鳥の治療を行うために、(社)北海道獣医師会に協力を要請した。

発見された野鳥は、別表のとおりである。

回収されなかった死体は、確認後、回収までの間に消失(捕食?)したものであり、発見時の写真から種を類推した。いずれも状況から、流出油による汚染が疑われた。

35羽が回収されたが、最初の個体が発見されたのは、事故発生からやや時間が経過した17日であり、生体で回収されたのは3個体のみであった。事故現場近くで回収されたのは3個体のみ(いずれも17日)であり、それ以外は事故現場から直線距離で約50km離れた浜益村で収容されている。15日の調査では確認できなかったウミスズメ類が多数を占めた。また、希少種であるマダラウミスズメが2個体含まれている。

これらの結果から、次のことが推測される。

- ① ウミスズメ類が多数を占めることから、汚染は主に、沖合で発生した。
- ② 多くの個体が浜益村で収容された原因は、事故に伴う漂着物も同様の場所で回収されたことから、海流の影響による。



③ 上記2つの理由から、汚染された野鳥が海岸に漂着するまで時間がかかった。

④ 調査できなかった海岸線も多く、海中に没したり捕食された可能性も考えると、死亡個体はさらに多いと思われる。

なお、酪農学園大学及び北海道大学による解剖所見（未発表）では、多くの個体に重油の摂取に起因すると思われる病変が認められたが、いずれも栄養状態は良好で、死亡原因としては羽毛の汚染による溺死あるいは衰弱死が疑われた。

2個体は生体で動物病院に収容され、アビは3日後の20日に死亡した。ウミスズメは、動物病院の懸命の治療で、一時は放鳥を検討するまでになったが、12月11日に死亡した。いずれの死因も重油摂取による影響と考えられた。

### 3 事故の反省と今後の課題

重油の流出量が少なく、救護件数も少なくてすんだので、あれこれ考える余裕も持てた。個人的感想も交えて整理してみたい。

#### (1) 事故発生時の被害予測

先に触れたEISマップは、作成途上のものであったが、大いに活用された。しかし、自然環境に関する情報は、質的にも量的にも不十分であった。海鳥類に限っても、その時期・海域にどの種がどの程度分布しているかわからないと、対策が立てづらい。

こういった情報の蓄積は、欧米等では常識になりつつある。また、国によっては、事故発生後速やかに、航空機によって影響を受けそうな海域の鳥類の密度を把握する制度があるが、日本ではこういった体制の整備はなされていない。

#### (2) 被害規模の評価

これも欧米では常識になりつつあるが、原因者に補償を求めるために事故の前後で自然環境の調査を行い、被害を評価するシステムが我が国にはない。(1)のデータが無ければ出来ないことである。

#### (3) 野生動物保護の協力体制

今回は関係機関を中心とした体制だけで乗り切ることが出来たが、多数の野鳥が救護された場合、ナホトカ号事件の時のように多くの人の協力が必要であり、そのための役割分担と体制、そして戦略の構築が必要になる。また、EISマップの充実のためにも、多くの人の協力が必要となる。

#### (4) 情報管理

野鳥の収容状況や、ボランティアの必要性についての問い合わせに対しては、個別の電話や、関係者間の一斉メールで対応した。件数が少なくそれで足りたが、ホームページに情報を集約する工夫があったら良かったと反省している。

#### (5) 危機管理体制

北海道庁にも船舶事故からの油流出事故も含め、災害時の危機管理マニュアルがあり、今回の事故もそれに則った対応を行った。しかし、上に述べた反省点にまで対応した

### 貨物船油流出事故に係る海鳥の被害状況

No.	月日	時刻	種類	場所	状態	措置
1	11.17	8:50	ウミスズメ	石狩市	衰弱	*1
2	11.17	9:50	ウミスズメ	浜益村	衰弱	*2
3	11.17	12:00	ウミスズメ	石狩市	死体	回収
4	11.17	14:00	不明	浜益村	死体	回収不能
5	11.17	14:20	ウミスズメsp.	浜益村	死体	回収不能
6	11.17	14:30	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
7	11.17	14:50	ウミスズメsp.	浜益村	死体	回収不能
8	11.17	14:50	ウミスズメsp.	浜益村	死体	回収不能
9	11.17	14:55	アビ	石狩市	衰弱	*3
10	11.18	9:55	ウトウ	浜益村	死体	回収
11	11.18	9:55	エトロフウミスズメ	浜益村	死体	回収
12	11.18	9:55	ウミスズメsp.	浜益村	死体	回収
13	11.18	9:55	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
14	11.18	9:55	エトロフウミスズメ	浜益村	死体	回収
15	11.18	10:30	ウミウ	浜益村	死体	回収
16	11.18	10:30	オオセグロカモメ	浜益村	死体	回収
17	11.18	11:00	ズガモ	浜益村	死体	回収
18	11.18	11:00	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
19	11.18	11:00	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
20	11.18	11:00	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
21	11.18	11:00	マダラウミスズメ	浜益村	死体	回収
22	11.18	14:20	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
23	11.18	14:20	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
24	11.18	14:20	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
25	11.18	14:20	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
26	11.18	14:20	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
27	11.18	14:20	ウミスズメsp.	浜益村	死体	回収
28	11.19	11:00	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
29	11.19	11:00	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
30	11.19	11:00	ウミスズメ	浜益村	死体	回収
31	11.19	11:00	マダラウミスズメ	浜益村	死体	回収
32	11.19	11:00	ウミスズメsp.	浜益村	死体	回収不能
33	11.19	11:00	ウミスズメsp.	浜益村	死体	回収不能
34	11.20	午前	ウミスズメsp.	浜益村	死体	回収不能
35	11.20	午前	不明	浜益村	死体	回収不能

\*1：動物病院に収容→12/11朝死亡

\*2：役場で一時保管→まもなく死亡

\*3：動物病院に収容→11/20朝死亡

ものではない。理想的には野生生物の救護に的を絞ったきめ細やかな行動計画が必要であろう。それは行政機関だけで作れるものではなく、研究者、野生生物についての情報を持っている個人やNGO、救護にあたる獣医師やボランティア等々と、立案段階からの協力が必要になるだろう。

この6月18日、19日には、東京に本部のあるNGO、日本環境災害情報センター（JEDIC）の主催する油流出国際ワークショップが札幌で開催される。諸外国の先進的な取り組み等が紹介されるようであり、参考にしたい。

最後になったが、前出の樋口孝城教授はじめ、野鳥に関する貴重な情報や心配の声をお寄せ下さった方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

# 身近な鳥の調査

藤 卷 裕 蔵

この12月に釧路市から「釧路市身近な指標生物市民調査・身近な生きもの野鳥調査報告書」が刊行された。地方自治体が野生生物の調査をした例はいくつかあるが、このような一般市民による調査を実施した例は、私の知る限りではこれが初めてであり、また調査の進め方がユニークで、今後このような調査を行う場合に参考になるとおもわれるので、その概要を紹介したい。

調査の目的は、「環境の動向を表すといわれる野生生物の分布などを調べることにより、私たちの街の自然環境の様子を把握することや、市民のみなさまが、より身近な自然へ関心をいただくことのできる機会の創出」である。平成13～14年度にはノコギリソウの調査を行い、今回の鳥類調査は2回目で、平成15～16年度の2年間にわたって行なわれた。

この調査のユニークな点は；

1. 鳥の分布を調べるだけでなく、鳥を環境をはかる物指しとしていること。
2. 調査対象が市内の特定の場所ではなく、市街地から湿原、海岸にいたるいろいろの環境を含んでいること。これは鳥を環境の物指しとすることと関係がある。
3. 調査員を市民から募集していること。
4. 応募した調査員には鳥の識別に詳しくない人もいるので、調査1年目は「プレ野鳥調査」とし、調査方法や観察方法の習得にあてたこと。

こうして、2年目に本調査が行われた。調査にあたっては、上記のプレ野鳥調査のほか、「調査マニュアル」と「鳥の鳴き声 (CD)」が配布された。調査対象はタンチョウ、オオジシギ、オオセグロカモメ、アカゲラ、ヒバリ、

シジュウカラ、ズスメなど23種であるが、タンチョウを「身近な鳥」とするあたりはさすが釧路である。調査期間は5～6月である。釧路市内の調査対象地域を1.0×1.5kmの大きさのブロック116か所に区切り、各自が調査期間中の都合の良い日・時間帯に担当ブロックで調査し、その結果をブロックごとにチェックシートに記入するのである。チェックシートには対象の23種の名前とその種の持ち点がかかれています、記録された鳥の持ち点を合計すると、そのブロックの総合点数がでるようになっている。持ち点は、タンチョウ10点、オオジシギ6点、アカゲラ4点、ズスメ1点というように、良好な自然環境に生息する種ほど高い持ち点になっているので、記録された種が多いほど、持ち点の高い鳥が多いほど、そのブロックの総合点数が高くなる。総合点数が51点以上であれば、そのブロックは「多くの野鳥が訪れる自然豊かな環境」、10点以下であれば「交通量が多く、樹木などの緑が少ない場所」といった評価になるわけである。

調査結果の一例として、ヒバリの分布図をあげておく。ブロックごとではその環境の自然度がわかり、分布図ではその種の市内における生息状況がわかるようになっている。まとめの中には、対象となった23種以外の鳥の名前もあげられている。それをみると、コジュリンやジョウビタキといった種があげられており、調査結果の信頼性を疑わせるようなところもあるが、一般市民参加の調査ではやむをえないかもしれない。

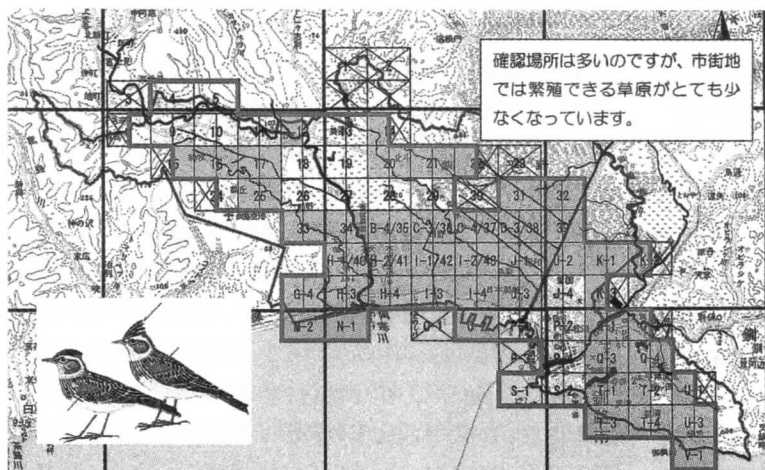
このような調査のメリットとして、市内の鳥の分布が明らかになることのほか、調査に参加した市民が身近な自然に関心をもつようになり、ゆっくりではあるが、やがてはそれが自然環境の保全に結びついていくことがあるであろう。また、数年おきに同様の調査を繰り返せば、自然環境のモニタリングとしても貴重な資料となる。

このような調査を企画したのは市の担当職員かもしれないが、調査を進めるに当たって、その手順、調査マニュアルの作成、調査員の指導に釧路市立博物館の鳥類研究者が大きな貢献をしたとおもう。最近では、自然との共生といったようなことが重要なキーワードになっている。そのような社会を目指すためには、行政機関の中に自然環境について専門知識をもった人材が必要、その重要性はますます大きくなるとおもう。

〒072-0005 美幌市東4条北2丁目6-1

## ◎ヒバリ (5点)

- ・ 96ブロックで確認されました。
- ・ 主に市域の中央部、南東部で確認されました。大楽毛から新富士 (M-2～J-3)、興津から桂恋 (T-3～V-1) など海岸線などでも多く見られました。



## シラガホオジロ群れでの飛来報告

日本野鳥の会 室蘭支部 篠原盛雄

2005年1月29日(日) 厳冬にしては朝から天候に恵まれて、南の温かい風が吹き込んで4~5度に気温も上がり絶好の鳥観察日和となりました。伊達長流川河口西側の田んぼにマガンの越冬を観察に行きますと、見慣れない鳥が1羽田んぼのヨシの先に止まっており、写真を撮りました。後から調べてみようと戻りかけると、海岸の枯れ草に、沢



シラガホオジロ  
2005年1月29日 長流川河口 撮影筆者

山の鳥がたかって、草の種をつついていました。先程の鳥と同じかと、車を近づけてみると、頭が白いものが混じっており、これはシラガホオジロだと思い、図鑑で見比べてみました。目の下の頬にははっきりと白斑があり目立ちます。腰と上尾筒は明るい赤褐色で、次列風切、三列風切は黒く明るいクリーム色の羽縁でくっきり見えます。雄の頭頂は白さが目立っていました。ひととこでじっとしていなく、2~3分ごとに群れでいっせいに場所を移動する動きの激しい鳥でした。翌日は大寒波がやってきて北西の風が強く、吹雪の状態になりました。再び観察に出かけてみますと、地吹雪で視界がなくなるような状態の中、47羽士の群れが田んぼを飛びまわって餌採りをしていました。この群れは2月1日(火)までこの田んぼ一帯に留まっていた。2月2日伊達の東側、稀府でこの群れらしき約50羽の群れが観察されています。海岸沿いに移動していったものと思われる。伊達でのシラガホオジロの50羽もの群れは初めてのことでした。

〒052-0021 伊達市末永町97-83

### 鳥好きの文学散歩5

### 吉村 昭 「漂流」

高橋良直

現代の文学作品に鳥が登場することはあまりないが、吉村昭の小説「漂流」(新潮文庫所収)は、アホウドリが重要な役割を演じるという稀な例である。

江戸時代の帆船はしばしば暴風雨に遭って破船した。乗組員の大半は生きて祖国に戻ることはなかったであろうが、幸運にもロシアに漂着したり、米国船に救助されたり、幾多の苦難の末に帰国を果たした例もまた多い。吉村氏はこうした遭難漂流を経て帰国した船員などの運命を描いた「漂流もの」ともいうべきいくつかの小説をものしているが、この「漂流」も史実に基づいて描かれた過酷な運命の物語である。

天明5年(1785)1月、土佐の国(高知県)の船乗り長平ほか3人が乗り組んだ三百石船が暴風雨に遭って漂流し、半月後に今は鳥島と呼ばれている無人島に漂着した。彼らは崖の上の平坦地でアホウドリの大群に遭遇する。

「今まで目にしたこともない異様な鳥の大群であった。全身が白く、翼の先端が黒い。巨鳥と言ってもよいほどの大きな鳥で、それらが、ひしめき合うように地表をおおっている。羽をおおっている鳥もあれば、薄桃色の大きな嘴で互いに突つき合っている鳥もいる。平坦地そのものが大きく揺れ動いているように、地表は鳥に埋もれていた。」

岩だらけで植物は育たず、飲料水もない島で彼らはアホウドリの肉を主食として命をつなぐが、長平とともに漂着した他の仲間が翌年までに3人もも死亡する。2年後に大坂舟の11人がこの島に流れ着くまで、長平はたった一人で

行きぬくのである。

「雨期がやってきて、海面に飛魚が群をなして飛ぶのがみられるようになった。毎年、季節季節に同じことをくり返す自然の営みに、長平は敬虔な気持ちでいた。人の力は無にひとしく、達者に生きてゆくためには自然の流れに素直に身を託さねばならぬと思った。」

アホウドリは4月に島を去り、9月には繁殖のためにこの島に戻ってくる。船も近づかぬ島にやってくるアホウドリは、食糧であったにとどまらず、長平にとってどれほど心の救いになり、励ましになったことであろうか。極限的な状態における鳥と人との苛烈な出会いである。このような鳥との出会いというものもあるのか。

やがて彼らは流木を集めて舟を作り始め、4年の歳月を経て舟が完成すると自力で島を脱出することに成功する。このあたりの描写は息詰まるような迫力があり、小説全体のハイライトになっている。長平の島での生活は12年に及んだ。それにしても、わずかな史料を元にこれだけの小説を構築する作家の創造力(想像力)というものに敬服する。

ところで、一時は絶滅したと考えられていたアホウドリが少数ながら再発見されたのは、1951年、当時鳥島に置かれていた測候所の職員によってであった。その顛末は作家新田次郎が小説化しており(新潮文庫「孤島」)、フィクションではあるが、これも興味深いものがある。

〒006-0851 札幌市手稲区星置1条6丁目8-1



### 野幌森林公園 探鳥会

2004.11.7

【記録された鳥】トビ、キジバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ルリビタキ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カケス、ハシブトガラス

以上 18種

【参加者】青山洋子、赤沼礼子、井上公雄、今泉秀吉、岩崎孝博、恵川和男・和子、大塚永利子、大野信明、岡田幹夫、尾崎 修、亀田 勉・節子、蒲澤鉄太郎、川村宣子、菊池敦子、小山久一、今 善三郎、斉藤正雄、坂井伍一・俊子、佐々木 裕、笹森繁明、品川睦生、千葉久子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、長尾由美子、松原寛直・敏子、守下憲治、長谷、原 美保、樋口孝城、辺見敦子、山口和夫、安 真一郎、山本和昭、山本昌子、横山加奈子

以上 42名

【担当幹事】岩崎孝博、松原寛直

### ウトナイ湖の探鳥会に参加して

2004.11.14 鈴木順子・燿介

僕は、去年この探鳥会に参加してたくさんの種類の鳥を見て面白かったので、今年も参加しました。

家を出る時はくもり空で雨が降らないかと心配でしたが、集合場所についた頃には天気もよくなりほっとしました。湖にはハクチョウやマガンがたくさんいました。幹事の方が先に来てシジュウカラガンがいるのを見つけておいてくれたのでワクワクしながら双眼鏡で探しました。そして、スコープでも見せてもらいました。去年、別の所でシジュウカラガンを1羽だけ見ましたが、その時はよく見えませんでした。今回は3羽もいたし、結構見やすかったです。

去年よりも見れた鳥の種類は多かったし、幹事の方や他の皆さんからいろいろなことを教えてもらえたのでとても楽しかったです。どうも有り難うございました。

〒063-0004 札幌市西区山の手4条10丁目2-23-303

【記録された鳥】カイツブリ、ウミウ、ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウビ、シジュウカラガン、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、ヨシガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、オオバン、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、カワセミ、ハクセキレイ、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 40種

【参加者】赤沼礼子、板田孝弘、岩崎孝博、氏家正毅、岡

田幹夫、梶本兼吉、菊池 仁・教子、北山政人、河野美智子、後藤義民、小西美美枝、小堀煌治、笹森繁明、島田芳郎・陽子、鈴木順子・燿介、品川睦生、高橋良直、高橋、高栗 勇、谷口勇五郎、戸津高保、中正憲信・弘子、浪田良三・典子、濱野由美子、松原寛直・敏子、道川富美子、村上トヨ、山口和夫、山田良造、柳川 巖、吉村 望・亨子、渡辺

以上 39名

【担当幹事】北山政人、道川富美子

### 野幌森林公園探鳥会

2004.12.5

【記録された鳥】コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ハシブトガラス

以上 12種

【参加者】岡田幹夫、亀井厚子、桑名 功、小西美美枝、小堀煌治、佐々木 裕、品川睦生、高橋良直、戸津高保、富川 徹、辺見敦子、松原寛直・敏子、山田良造、山口和夫、吉田慶子

以上 16名

【担当幹事】戸津高保

### 小樽港探鳥会に初めて 参加させて頂き感動の連続

2005.1.23 梶本兼吉

午前中は吹雪で、皆こんなの初めてだと望遠鏡の雪を払いつまづいて、ひょっとすると初参加の私が雪を持って来たのではないかと、内心ひやひやしていました。だが昼食後カラッと晴れたではありませんか、ホラッみろやっぱり晴れ男だったと自信をつけた次第です。纏めるのが下手ですので3つの編に分けて書く事にします。

《尾白鷺編》私は定年(S17・11・2生まれ)になると同時に昔遊びをするボランティアを結成し白石区で凧揚げ大会等やっています。その時黒い鳥の凧を200m揚げた処トビが珍しげに数羽近づいてきて旋回して、何故か嬉しくなったものです。それよりもフェリー埠頭で生れて初めてオジロワシが空高く美しい純白の尾をなびかせて旋回しているのを見せてもらいました。さらに高く大気圏すれすれ迄いって行くのではないかと想われるほど舞っているのを眺めていると体中何もかもフツ切れ涙がでそうになりました(歳のせいかも)。

《鴨編》子供の頃田舎では田んぼの水が涸れないように山手に溜池があり秋になると池の水が干し上がって、カモが枯れ木の根っ子や草わらに隠れているのを大人達が追い詰めて生け捕りにしていました。カモの種類があるとは知らなく、なんとこんな色々な種類があるとは、綺麗な黒と白い腹と首の斑点を眺めているともうカモナンなんか食えることを考えるだけでもバチがあたりそうに罪の深さを感じます。

《鶉編》帰りのJRの汽車の窓から孝ちゃん(元音江村字稲田今深川市の幼な友達で中卒後定年になって昨年偶然



再開し探鳥会を紹介してもらいました)に教えてもらいながら青黒い海をじっと見つめていると、なんとウミウが1羽亦1羽と波間に黒くしかもゆったりと漂っているではないか、ああ今のこの歳迄漠然と海は広いなあと見ていただけでカモメらしき鳥は見ているが、まさか鶺鴒が居るとは全く知らなかったと云うか見えなかったと云うか。鶺鴒なら五木ひろしの長良川艶歌にでてくる「水に浮かべる伽狩火は誰に想いをはせるやら」に出てくる鶺鴒の鶺鴒しか知らなかったし北海道に居るとは思わなかった。ヨーシ今からでも遅くない、今日来ていた小学生らしき(たしか1人はウトナイ湖で水の中に落ちそうになって鳥を探していたのを、落ちないように見守ってやったものだ。この人のような熱心な子供が環境庁長官に成ってくれば日本の自然を守ってくれるのだが)プロに追いつくように目と耳と身体を鍛えようと心に決めて帰途したものでした。

〒003-0006 札幌市白石区東札幌6条5丁目2-24-103

【記録された鳥】アビ、オオハム、シロエリオオハム、ミミカイツブリ、アカエリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、オジロワシ、マガモ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、カモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ワシカモメ、ウミガラス、ケイマフリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ツグミ、ハギマシコ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト 以上 28種

【参加者】赤沼礼子、岩崎孝博、氏家正毅、白田 正、梅木賢俊、大表順子、岡田幹夫、岡部良雄・三冬、梶本兼吉、亀井厚子、北山政人、栗林宏三、小西美美枝、河野美智子、鈴木幸弥・順子・耀介、清水朋子、白澤昌彦、島田芳郎・陽子、高橋良直、武田由里子、田中志司子、徳田恵美、戸津高保、中正憲信・弘子、成澤里美、原 美保、濱野由美子、樋口孝城、辺見敦子、広木朋子、松原寛直・敏子、三浦美重子、山口和夫、山本昌子 以上 40名

【担当幹事】白澤昌彦、梅木賢俊、中正憲信

## 鳥民だより

### ●総会のご案内

日 時：平成17年4月8日(金)午後6時30分

場 所：札幌市民会館 第6会議室

総会終了後に懇親会を予定しております。会員の皆様、多数ご参加下さい。

### ●野鳥写真展と写真募集のお知らせ

#### 〈野鳥写真展〉

期 間：平成17年4月26日(火)～5月16日(月)

場 所：光映堂2階ギャラリー

札幌市中央区大通西4丁目

TEL 011-261-0101

展示作業は4月25日午後5時30分から、撤去作業は5月16日午後5時30分から行います。お手すきの方のご協力を願います。

#### 〈写真募集〉

写真は原則として道内で撮影したもので、サイズは四ツ切り、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年

月、撮影場所を添付して下さい。送付は光映堂の小林さん迄。4月25日直接持参する場合は事前に連絡願います。

作品一点につき、光映堂の本店と地下街店で使える商品券(1,000円)一枚を進呈します。

問い合わせは小堀

TEL 011-591-2836 (19時～22時)まで。

### ●会費納入のお願い

この号(第139号)と一緒に郵便振替用紙を入れてあります。速やかな会費納入をお願いします。

### ●入会勧誘にご協力を

お友達、お知り合いの愛護会入会をお誘い下さい。愛護会会員は個人会員、家族会員を合わせ現在430名ほどですが、今後の健全運営のためには500名程度の会員(会費収入)が望まれます。会員の皆さまのご協力をお願いします。

### 【新しく会員になられた方】

山口 一誠 〒270-1108

我孫子市布佐平和台1-5 A-708

梶本 兼吉 〒003-0006

札幌市白石区東札幌6条5-2-24-103

高林 和宏 〒004-0065

札幌市厚別区厚別西5条2-17-39

大関 勝男 〒061-1104

北広島市西ノ里4-3-3

奥山 正樹 〒060-0004

札幌市中央区北4条西18丁目 桑園住宅401-14

## 宿泊探鳥会のお知らせ

### 春の森と山は野鳥であふれています

平成17年度の宿泊探鳥会は東大演習林(富良野)と白金温泉(美瑛)周辺です。ガイドは元東大演習林におられた有沢 浩さんにお願しました。有沢さんは東大演習林はもとより近郊の探鳥地にも詳しく、東大演習林内、白金温泉小鳥の村など、いくつかの探鳥ポイントを案内していただけることになっています。春盛りです。森の鳥、山の鳥のコーラスシャワーを浴びてみましょう。

月 日	6月4日(土)～5日(日)
集合場所	札幌市中央区北大通り西3丁目 道新ビル前(大通り側)
集合時刻	4日午前6時30分
宿 泊	大雪山白金観光ホテル
札幌帰着	5日 午後6時頃
定 員	45名
会 費	17,000円(バス、宿泊、食事込み) ★4日の昼食は各自ご用意下さい。
申込み先	蒲澤会計幹事 TEL 011-663-9783

4月1日午前9時から電話で受付け、定員になり次第締切ります。



- ☀ 探鳥会は、悪天候でない限り開催します。
- ☁ 昼食、双眼鏡などの観察用具、筆記具、野鳥図鑑などをご持参ください。  
(融雪期や雨天の時は、防寒衣、雨具、長靴などを用意してください。)
- 🚗 公共交通機関を利用される場合には、事前に時間などをお確かめください。
- ☆ 探鳥会の問い合わせ

(社)北海道自然保護協会 ☎ 011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭日を除く)

開催日	探 鳥 地	集合場所及び集合時間
4月10日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	JR新札幌駅発 夕鉄バス(文京通西行)大沢公園入口下車、JRバス(文京台循環線)文京台南町下車、徒歩5分。長靴や防寒衣などが必要。 森林内の残雪の中からフクジュソウが咲き始める季節、さえずりやドラミングを聞きながら早春の鳥を探します。	
4月24日(日)	宮 島 沼	大富会館うら湖畔側、午前10時
	JR函館本線岩見沢駅発、又は学園都市線(札沼線)石狩月形駅発、中央バス(月形行又は岩見沢行)、大富農協前下車、徒歩5分。 雪解け直後の湖面で羽を休めるマガンたちを観察します。壮観な大群の飛翔は春の風物詩であり、感動します。	
5月1日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	交通機関は、4月10日の案内参照のこと。 ミスバショウの花が満開になる森林の中で、キビタキやオオルリなどを探します。	
5月5日(木)	藤 の 沢	白鳥園、午前9時
	定鉄バス札幌駅発(定山溪行又は豊滝行)、地下鉄真駒内駅発(藤野3条2丁目行)、藤野3条2丁目下車、徒歩10分。 早春の芽吹きや花を楽しみながら、白鳥園の裏山(藤野マナスル)で探鳥します。	
5月8日(日)	千歳川周辺(早朝探鳥会)	孵化場手前の橋付近の河川敷広場、午前5時
	早朝のため交通機関はありません。自家用車の相乗り希望の方は幹事まで相談してください。防寒衣必携のこと。 千歳川沿いの豊かな自然の中で、オオルリ、キビタキ、ヤマセミなどを探します。	
5月15日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	交通機関は、4月10日の案内参照のこと。 春の息吹きに彩られた森林内で、勢揃いした夏鳥たちのさえずりを聞きながら探鳥します。	
5月22日(日)	鶴 川 河 口	JR日高本線 鶴川駅前、午前9時30分
	JR鶴川駅下車、又は道南バス鶴川農協前下車、徒歩5分。札幌駅ターミナル(大谷地ターミナル)発、道南バス ペガサス号利用、鶴川(四季の館)下車。四季の館駐車場に集合も可。 河口周辺や人工干潟でシギ、チドリ類や海鳥たちを、牧場周辺では草原の鳥や猛禽類を探鳥します。	
6月4～5日(土、日)	東京大学演習林・白金温泉	本号の13ページ参照
	優れた森林環境の中で、夏鳥たちを探鳥します。早朝探鳥もします。	
6月11日(土)	平和の滝(夜の探鳥会)	平和の滝駐車場、午後6時30分
	地下鉄琴似駅発、JRバス(西野平和線)平和の滝入口下車、徒歩20分。 ツツドリ、ヨタカ、コノハズクなどの鳴き声を探鳥します。懐中電灯、防寒衣、防虫薬などが必要です。	
6月12日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前、午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。 ノゴマ、コヨシキリなどの草原、原野の鳥たちを探鳥します。	
6月19日(日)	東 米 里	東米里小中学校正門前、午前9時
	地下鉄菊水駅発、JRバス(米里線)東米里小学校前下車。 カッコウの声がわたる草原や河川沿いでエゾセンニュウ、コヨシキリなどを探鳥します。	
6月26日(日)	野幌森林公園	大沢口、午前9時
	交通機関は、4月10日の案内参照のこと。 鳥たちの営巣の最盛期、森林内で餌を忙しく運ぶ鳥たちを観察します。	

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287  
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465  
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>